

# 高野山の御手印縁起について

金 泰 虎

## はじめに

高野山の御手印縁起は、庄園領主高野山にとって雑役の賦課や寺領の確保とその一円支配の根拠とされたものである。最初にその縁起に関する研究を行った朝河貫一氏は、御手印縁起が偽作されたことを指摘した<sup>(1)</sup>。その後、ほとんどの研究者は御手印縁起が偽作されたという観点にたって研究を進めてきた<sup>(2)</sup>。また、偽作ということが明らかになってからはそれがいつ、何の目的で偽作されたのかへ、問題の関心が寄せられるようになった。

偽作の時期について江頭恒治氏<sup>(3)</sup>は、紛失した御手印縁起が平治元（一一五九）年に鳥羽の宝蔵から発見されたことからこの直前に偽作されたとした。これに対して赤松俊秀氏<sup>(4)</sup>は偽作時期を十一世紀初めの寛弘元（一〇〇四）年の直前とし、正暦五（九九四）年の火災で失われた伽藍の再建を目指していた高野山にとって

国司の圧迫からのがれ、寺領庄園を獲得して寺領の確立を目指したのが偽作の目的であるとする。また、和多秀乗氏<sup>(5)</sup>と久保田収氏<sup>(6)</sup>は神仏習合の側面、つまり丹生都比売より空海に所領を譲り渡したという説話から御手印縁起を論じ、和多氏は十世紀ないし十一世紀初、そして久保田氏は十世紀末に成立したとする。赤松氏よりやや時代が遡るものの、両氏とも赤松氏の見解を受け継いだものと言えよう。しかしその一方で、なお服部英雄氏<sup>(7)</sup>は、赤松氏が論拠とする寛弘元年の太政官符案が高野寺縁起という高野山が編集した縁起の中に収められており、原文ではないことを取り上げて江頭氏と同じ平治元年の成立説を打ち出した。しかし、偽作時期とその目的をめぐる諸説のなかで赤松氏の見解がほぼ定説的な地位を占めてきた。

ところが、小山靖憲氏は十一世紀後半から領域的庄園制支配が始まるとする理解に立ちながら<sup>(8)</sup>、最近御手印縁起に関する定説的な赤松説

(1) 朝河貫一「中世日本の寺院領」『歴史地理』、三五―三六号、一九二〇年

(2) 朝河氏の偽作説以来、いずれの研究も偽作説に同調しているが、偽作の時期については様々な見解がある。しかし、ほとんどの研究が偽作説を打ち出しているが、森田龍彦「御遺告及び御手印縁起の研究」(『密教研究』七五・七六号、一九四一・四二年)だけは偽作説を否定する。

(3) 江頭恒治「高野山領庄園の概観」『高野山領庄園の研究』有斐閣、一九三八年

(4) 赤松俊秀「高野山御手印縁起について」『続鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九六八年

(5) 和多秀乗「高野山と丹生社について」、和多秀乗・高木誦元編『日本名僧論集 第三巻、空海』吉川弘文館、一九八二年

(6) 久保田収「高野山における神仏習合」『神道史の研究』皇学館大学出版部、一九七三年

(7) 服部英雄「未来年号の世界から」『史学雑誌』九二―九三号、一九八三年

(8) 小山靖憲「庄園制的領域庄園をめぐる権力と村落」『中世村落と庄園図』東京大学出版会、一九八七年、同氏「古代庄園から中世庄園へ」『歴史地理教育』、三二九号

を批判的に検討した<sup>(9)</sup>。その結果、御手印縁起の偽作時期について寛治二（一〇八八）年に白河上皇に献上するものとして製作されたとし、十一世紀初めの高野山は寺領荘園の獲得にそれほど熱心ではないので、これに作成目的を結び付けることはできないと論じた。そして、御手印縁起は開創にまつわる神仏習合的伝承を公文書の形式で表したもので荘園所領の領有觀念が薄く、宗教的聖域の確保が目的であって、寺領荘園の獲得手段としてそれが使われるのは十三世紀に入ってからだとする。なお、氏は御手印縁起が偽作された後、いかなる機能を果たしたのかについても研究を進め、その機能が高野山の「旧領」回復の論理と一円支配の論理に展開することを考察している<sup>(10)</sup>。

しかし、かかる諸研究は縁起の偽作という観点にたって焦点を合せたあまり、御手印縁起以外の史料についての総合的判断を欠いており、十分な検討までにはいたっていない。特に、小山氏は十一世紀末に領域的荘園制が形成してくるという自説を所与の前提として御手印縁起を寛治二年に偽作されたものというように論理を導き、鎌倉期に確立される御手印縁起と関連性のある古文書類についてすべてを偽作と断定してしまったのである。

本稿では、従来の研究成果に学びつつ、御手

印縁起をほかの史料との関連の中で評価・検討しなおし、偽作の時期を追究することにする。このなかで偽作の目的を探り、なお四至の意味についても検討する。

かかる試みは高野山という権門寺院に伝わる縁起の成立時期と目的を探るという点では、一見偏狭なものと思われざるかもしれない。ところが、この縁起の偽作は領域的荘園制の形成と関わる問題が介在しているがゆえに、領域的荘園制の開始時期を明確にするためには欠かせない研究である。

## 第一章 御手印縁起の内容

本章では、御手印縁起がいかなるものであるかまずその内容について確定しておきたい。

御手印縁起は高野山にとって雑役の負担、寺領の確保、一円支配の根拠となった重要なものだったにもかかわらず、不思議にも寺外に流出していた<sup>(11)</sup>。平治元（一一五九）年七月一日の「官符絵図記文等奉納状」に「鳥羽院付属宝物之中、披見蔭底、有草真書、是則弘法大師自筆之遺記也、筆点已妙、手印無銷」とあって<sup>(12)</sup>、御手印縁起を鳥羽上皇の遺品の中から発見した美福門院によって高野山に寄進されたのである。小山靖憲氏<sup>(13)</sup>はこの平治元年の奉納状に列記

(9) 小山靖憲「高野山御手印縁起の成立」安藤靖一先生退官記念会編『和歌山地方史の研究』同会、一九八七年

(10) 小山靖憲「高野山御手印縁起と荘園制」『紀州経済史文化史研究所紀要』八号、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、一九八八年

(11) 御手印縁起の流出契機について前掲赤松「高野山御手印縁起について」は、上皇や貴族が高野参拝に訪れた時高野山は空海の遺品や手跡を献上することが多かったとする。さらに、前掲小山「高野山御手印縁起の成立」で、氏はかかる赤松氏の流出のきっかけを引き継ぎ、流出時期を寛治二（一〇八八）年と大治二（一二七一）年二回にわたる白河上皇の高野山参詣のなかで

寛治二年であった可能性を指摘しているが、賛成できる。

(12) 『大日本古文書』家わけ第一、高野山文書、続宝簡集二一。以下より『大』に出典のみを記す。鳥羽の宝蔵については田中貴子「宇治の宝蔵—中世における宝蔵の意味—」（『外法と愛法の中世』砂子屋書房、一九九三年）が触れ、鳥羽離宮内に白河院によって造られたもので正式には勝光明院宝蔵だとする。なお、この宝蔵は院政期における上皇の権力を象徴するものであったとする。一方、竹居明男「鳥羽宝蔵納物覚書」（『国書逸文研究』二二二号、一九八八年）では、鳥羽宝蔵納物のすべてを調べて書き上げている。

(13) 前掲小山「高野山御手印縁起の成立」五七～六〇頁

されているものを取り上げて御手印縁起の内容を確定しようとした。この奉納状の配列は以下の通りである。

官符絵図御記文等

一高野絵図壺帖

弘仁七年七月八日太政官符壺通

弘仁七季七月二八日国判

承和元季十一月十五日大師御遺告文壺通

延暦十九年九月十六日宣命文壺通

高野絵図壺幅国印七箇所

承和三年七月二七日国判 国印一所

以上、件文等被書具絵図

一山絵図一帖

弘仁七年七月八日太政官符壺通 在大師御手印四箇所  
国印三箇所 ※

弘仁七年七月二八日国判

当山四至注文参通

山絵図壺幅在国印八箇所

承和元季九月十五日大師御記文壺通 大師御位署御名并  
御手印四箇所在之  
国印六箇所  
裏槇尾僧都判被加之 ※

承和三季七月二七日国判文壺通

一高野住山料御遺記文壺通

承和二年三月十五日御遺告壺通 在大師御名  
相副国判

※は手印が捺されている。

小山氏は「官符絵図御記文等」について次のように述べている。御手印縁起は「高野絵図壺帖」や「山絵図壺帖」、そして「高野住山料御遺記文」の三つの部分で構成されている。ことに、「山絵図壺帖」のみに空海の手印が据えられていることから、「山絵図壺帖」を狭義の御手印縁起、三つのすべてを広義の御手印縁起とする。そして、「高野絵図壺帖」と「山絵図壺

帖」を比較検討し、後者の内容が前者より省略されていることから成立は前者が先行するが、後者の成立もそれほど隔たりはないと推測する。

なお、御手印縁起の呼称については様々な混乱がみられ、『弘法大師全集』<sup>(14)</sup>や『弘法大師伝全集』<sup>(15)</sup>では、「高野絵図壺帖」に相当する一連の文書と絵図を「太政官符案并遺告」と呼び、「山絵図壺帖」に当たる一連の文書と絵図を「御手印縁起」と呼んでいる。一方、『続群書類従』所収の「高野山官符」<sup>(16)</sup>では「高野絵図壺帖」と「山絵図壺帖」を合せて「高野山官符」と呼んでいる。

このように御手印縁起の定義と呼称については混乱が見られる。ところが、「官符絵図御記文等」が鳥羽上皇の遺品の中から発見され高野山に寄進されているが、その経緯のなかに御手印縁起という言葉は見当たらない。したがって、平治元年に奉納したものがただちに御手印縁起とは言えない。高野山文書を丹念に検索すると、建保六(一二一八)年以前には御手印縁起という呼称は見られず、「大師御手印」、「大師手手跡」、あるいは「大師御自筆」などの言葉で現われる<sup>(17)</sup>。ここで便宜上、建保六年以前のものを「御手印」と呼ぶことにする。

ところが、建保六年に高野山と吉野金剛山との堺相論が本格化する。この際、初めて「御手印縁起」の言葉が登場する<sup>(18)</sup>。そして貞応元(一二二二)年の「御影堂御物等目録」<sup>(19)</sup>には「御手印縁起並絵図合三通」という記事が見ら

(14) 高野山大学密教文化研究所編『弘法大師全集』第二輯、同朋社出版、一九七八年

(15) 長谷宝秀編『弘法大師伝全集』第一巻、六大新報社、一九七五年

(16) 『続群書類従』二八輯上、釈家部、続群書類従完成会、一九六〇年

(17) 仲村研編『紀伊国阿豆河庄史料集』一・二、吉川弘文館、一九七六年、三七号など。以下は『阿』に番号だけを記す。

(18) 『大』宝簡集四八・五六〇

(19) 『大』宝簡集十二・二五二

れ、この段階では御手印縁起と呼ばれるものの内容が決められていた。引き続き、嘉元三（一三〇五）年の「金剛峯寺御影堂奉納御物文書新定目録上」<sup>(20)</sup>にも、また「御手印縁起并絵図合三巻」とあり、貞応元年と嘉元三年のものがほぼ同じものと考えて間違いないだろう。鎌倉初期の建保六年に御手印縁起の概念が定着したと言えよう。

では、御手印縁起はいかなるもので構成されていたのか。この手掛りを与えるのが次の「弘法大師手印絵図遺告等目録」<sup>(21)</sup>であり、その内容は以下のとおりである。

#### 弘法大師手印絵図遺告等目録

##### 御手印巻

官符 弘仁七年七月八日

堺 啓他天皇 東丹生川上 南阿帝川横峯  
堺畔 西神勾屋川 北吉野川

##### 山絵図

承和元年九月十五日 金剛峯寺大僧都一一書

承和三年七月二七日 国判

##### 高野絵図巻

官符 弘仁七年七月八日

御遺告 承和元年十一月十五日

詔戸文 延暦十九年九月十六日

絵図 承和三年七月二七日国判

御遺告巻 承和二年三月十五日  
在国判

堺 東字知丹生川 南阿帝川横峯  
西神勾屋川 北吉野川

以上、三巻目六如件 曼荼羅院

この「弘法大師手印絵図遺告等目録」は年月日を欠いているが、嘉元三年の「金剛峯寺御影堂奉納御物文書新定目録上」に書かれている「御手印縁起并絵図合三巻」の三巻と対応すると思われる。その根拠は、「弘法大師手印絵図遺告等目録」が「御手印巻」と「高野絵図巻」、

そして「御遺告巻」の三巻で構成され、嘉元三年の三巻と合致しているからである。ここで高野絵図と遺告は御手印縁起に含まれず別のものとして扱われていることがわかる。つまり、「官符絵図御記文等」が高野山に寄進されて再編成されつつ御手印縁起という言葉が誕生し、「弘法大師手印絵図遺告等目録」ように配列されたと考えられる。次の（表1）は「官符絵図御記文等」と「弘法大師手印絵図遺告等目録」との対応関係をまとめたものである。ここで、「官符絵図御記文等」にある「弘仁七年七月二八日国判」が「弘法大師手印絵図遺告等目録」には見当たらないものの、両者を同じものと見なせらる。ところが、両者の間は配列が異なっており、「官符絵図御記文等」では後日御手印縁起になる中身が揃っていたものの、御手印縁起という意識はなかったと言えよう。その理由は後日御手印縁起になる「山絵図壺帖」が「官符絵図御記文等」では最初に配列されず、「弘法大師手印絵図遺告等目録」には最初に配置されるようになる。この現象は高野山が構想する御手印縁起について「御手印巻」と名づけ權威を与えたために違いない。すなわち「官符絵図御記文等」の「山絵図壺帖」が再配列されて最初に登場し、なお巻の名も「御手印巻」と改められて御手印縁起と呼ばれたのである。だから、御手印縁起とは小山氏のいう狭義の「山絵図壺帖」の内容と合致しているものの、「御手印巻」と配列や巻の名が異なっており御手印縁起と言えない。したがって、真の御手印縁起は「御手印巻」を指すものである。

かかる御手印縁起は「但長吏新補之時、所司相率可許拝見、其外山門備証文、有可經天覽之事者、可用書写之案文也」<sup>(22)</sup>のように、案文を

(20) 『大』宝簡集六二一五二

(21) 『大』宝簡集二一十三

(22) 註(12)の史料に同じ

(表1)「官符絵図御記文等」と「弘法大師手印絵図遺告等目録」

▽「官符絵図御記文等」	▽と△の対応	△「弘法大師手印絵図遺告等目録」
ア 高野絵図巻帖	ア β	α 御手印巻
A 弘仁七年七月八日太政官符 B 弘仁七季七月二八日国判 C 承和元春十一月十五日大師御遺告文 D 延暦十九年九月十六日宣命文 E 高野絵図 F 承和三年七月二七日国判	A f B × C g D h E i F j	a 官符弘仁七年七月八日 b 堺 c 山絵図 d 承和元年九月十五日金剛峯寺大僧都一一書 e 承和三年七月二七日国判
イ 山絵図一帖	イ α	β 高野絵図巻
G 弘仁七季七月八日太政官符 H 弘仁七年七月二八日国判 I 当山四至注文 J 山絵図巻幅在国印八箇所 K 承和元季九月十五日大師御記文 L 承和三季年七月二七日国判	G a H × I b J c K d L e	f 官符弘仁七年七月八日 g 御遺告承和元年十一月十五日 h 詔戸文 延暦十九年九月十六日 i 絵図承和三年七月二七日国判 j 承和三年七月二七日国判
ウ 高野住山科御遺記文	ウ γ	γ 御遺告巻
M 承和二年三月十五日御遺告	M k	k 承和二年三月十五日御遺告

作成していることがわかる。このことから何通かの案文が作られたと考えられる。ここで今日

高野山に伝来されている御手印縁起・高野絵図・御遺告を整理したのが(表2)である。弘法大

(表2) 現存する御手印縁起・高野絵図・御遺告

箱	模様	幅	内 容
①	籬菊	1尺7寸	a 太政官符弘仁七年七月八日(内印17ヶ所)、b 国符弘仁七年七月二八日、c 四至注文三通、d 山絵図、e 承和元年九月十五日大師御名、f 承和三年七月二七日国判
②	金霞	1尺6寸4歩	a 太政官符案弘仁七年七月八日、b 国符弘仁七年七月二八日、c 四至注文三通、d 山絵図、e 承和元年九月十五日大師御名、f 承和三年七月二七日国判、但し後醍醐の奥書あり
③	孔雀	1尺7寸3歩	a 太政官符案弘仁七年七月八日、b 国符弘仁七年七月二八日、c 四至注文三通、d 山絵図、e 承和元年九月十五日大師御名、f 承和三年七月二七日国判、但し後醍醐の奥書あり
④	獅牡	1尺7寸	ア太政官符案弘仁七年七月八日、イ国符弘仁七年七月二八日、遺告住山弟子、ウ丹生津比売等の文、エ絵図、オ承和三年七月二七日国判、但し裏に高野絵図あり
⑤	艸牡	1尺6寸4歩	ア太政官符案弘仁七年七月八日、イ国符弘仁七年七月二八日、遺告住山弟子、ウ丹生津比売等の文、エ絵図、オ承和三年七月二七日国判、但し後醍醐の奥書あり
⑥	菊水	?	ア太政官符案弘仁七年七月八日、イ国符弘仁七年七月二八日、遺告住山弟子、ウ丹生津比売等の文、エ絵図、オ承和三年七月二七日国判、但し後醍醐の奥書あり
⑦	桔梗	1尺7寸	遺告真然大徳等文(国判・朱印23ヶ所)、裏に高野住山遺告あり
⑧	蓮華	1尺6寸2歩	遺告真然大徳等文、但し朱印国判なし、後醍醐上皇奥書あり(御手なし)
⑨	滝絵	1尺7寸8歩	遺告真然大徳等文、但し国印を筆で書き、後醍醐上皇奥書あり(御手判なし)
⑩	青金	1尺7寸4歩	遺告真然大徳等文、但し国判・御手形27ヶ所あり、裏に醍醐寺三宝院経蔵本とある

(注)『弘法大師全集』に基づいて整理したものである。

師全集の編者は①～⑩のすべてを御手印縁起と呼んでいるが、検討したように①②③が御手印縁起にあたる。そして④⑤⑥は高野絵図であり、⑦⑧⑨⑩は御遺告と分類することができる。特に、編者は①④⑦⑩を大師の真筆とし、残りは模写とする。

以上、御手印縁起を定義しなおして御手印縁起が「御手印巻」にあたり、現在高野山に伝来している御手印縁起は①②③の三つであることを述べた。次章では御手印縁起の偽作時期やその目的を探るため、寛弘元年官符を含めて寛弘年間における一連の史料と高野山の動向を総合

的に考察する。

## 第二章 御手印縁起の偽作時期と目的

前章で御手印縁起の内容について分析してきたが、それは偽作されたというのが通説となっている。では、いつ偽作されたのか。まずその偽作時期をめぐる小山・赤松氏の両説について検討したい。赤松説の出発点になったのが次の寛弘元（一〇〇四）年の太政官符案<sup>(23)</sup>である。長文ではあるが、取り上げることにする。

大政官符紀伊国司

雑事式个篠

一応寺家地与中納言平卿所領庄田四至内、慥令注山地田畠事

四至 東限大日本国堺川、今案謂丹生川 南限阿帝川南横峯  
西限応神山谷、今案謂星川神勾谷 北限吉野川

右得金剛峯寺去七月二八日奏状称、謹検案内、寺家本願弘法大師以入学受持之密教、帰朝流布之弘願、誓而投三鈷可示有縁之地者、爰帰朝之後、為求機縁之地、尋究高山出行之間、途中相謁獅師二人云、願有驗山高獄之地、須為与仏法之寺者、祖師歆喜、共引高野之雲峯、重陳云、吾等是此山領主丹生高野祖子両神也、幸偶聖人遂宿願、仍注領山之四至、永奉結縁之三宝願建立伽藍、引導吾等、隨則吾等為護法神、永以護持者、所陳未畢即消矣、大師念願相応、既得勝地、為築仏壇、夷兵之地下、掘出古昔之宝劔、彌知先世為佛地之由、為造材木載木之俣中、在所投之三鈷、仰拜誓願有靈驗之事、機感々応、肇建此寺、具録状、謹以奏聞、大政官弘仁七年七月八日符称、十禪師空海奏状称、耆闍崛嶺、尺迦之迹移以不絶、孤岸奇峯、観音之跡流来相続、尋其所由、異所同趣、仍上奉為国家、下為利群生、芟夷蕪、建立伽藍、自爾以降、恵日留峯、初開密教之蔵、定水出洞、長流真言之源、望請天裁、件山四至之内、永以領掌者、依請者、ア然後大師以全身入定、曾不爛壞、待彌勒之出世、爰時代推移、適付負雜役、然而依寺家奏状、承和三年三月十日・仁寿元年九月二三日兩度下給官符、被免除已了、自爾以降専無他妨、而件卿所領石垣庄司等、恣奪妨推取、所謂其所妨取押戸・立神・相原・板廬・花藺・志賀・長谷・毛無原・古佐布等地也、或拔干捨寺家之勝示、打竈彼庄之領地、今件地従本願寺、或鎮護佛神堂社之辺、或所領山谷入図田地、仍注其由雖触示、彼庄司等、偏假本家之威勢、曾無是非之弁定、夫佛地犯塵之罪重、況乎掠取長財佛物、既同逆罪、何以在俗輒任領寺家地乎、件地施入主義化大神、建立入定聖人、何況処々官符龜鏡而重帖、豈以致妨乎、然而辺夷之輩不帰佛法、唯憑主威強致此妨、非蒙公家鴻恩、何断非理之横妨矣、望請蒙天裁、任旧領被令停止他妨者、左大臣宣、奉勅、宜加下知、寺家地與中納言平卿所領四至内、慥可注者、

(23) 『平安遺文』四三六号、「前田家本高野寺縁起所収」

(中略)

以前篠々如件、国宜承知、依宣行之、符到奉行、  
従四位上守宮内卿兼行権左中弁信乃権守源朝臣道方

右大史正六位上内蔵朝臣為親

寛弘元年九月二五日

寛弘元年の官符には「官符絵図御記文等」の「高野絵図壺帖」や「山絵図壺帖」に含まれる弘仁七（八一六）年七月八日の官符が引用されている。その弘仁七年官符に示されている四至内の立神・相原・板廬・花藺・志賀・長谷・毛無原・古佐布などの地を石垣庄司らが寺家の勝手を抜き捨ててその地を占領したと高野山が主張している。高野山は雑役の賦課のため朝廷に訴え、朝廷が寛弘元年九月二五日の官符でもって国司に「寺家地」と中納言平惟仲の所領石垣庄（後の阿弓河庄）の位置関係についてすみやかな注進を命じたのである。御手印縁起の四至と高野山が取り上げている地名を紀伊国の地図に示したのが（図1）である。

寛弘元年の官符は、御手印縁起の偽作時期と目的における赤松説の出発点となっており、ここで「官符絵図御記文等」と「弘法大師手印縁起遺告等目録」の弘仁七年七月八日官符が見られるので御手印縁起の偽作は寛弘元年の直前であるとする。しかし、寛弘元年の官符に御手印縁起の一部である弘仁七年七月八日官符が見られるからといって、ただちに御手印縁起が成立しているとは断定できない。

一方、小山氏<sup>(24)</sup>はこの寛弘元年官符が偽作されたとし、以下の二点を指摘する。一つ目は、高野山が主張する四至の内容があまりに唐突で官符の主旨に適合していない。二つ目は、高野

山側が石垣庄司等の押妨地として取り上げた地名の一部が石垣庄からあまりにも遠く離れており、高野山を南→西→北の順に取り巻く機械的配列である。かかる小山氏の見解は、寛弘元年の官符をもとにして御手印縁起の偽作年代を推定した赤松説の再検討を迫るものであった。しかし、小山氏のいうとおり寛弘元年官符が偽作されたとすれば、氏の御手印縁起の偽作時期である寛治二（一〇八八）年以降に何故高野山が寛弘元年官符を偽作する必要があったのか明らかにすべきである。小山氏のように文書の形式は若干おかしいが、文書に書かれている内容はおおむね事実とみてよかろう。

ここで寛弘元年官符の真偽を問うためには、文書の形式だけに拘らずその内容が真実であるかどうかの問題からの分析も重要であろう。寛弘元年官符で取り上げている石垣庄（現在の和歌山県有田郡清水町を中心とする地域）は枇杷左大臣藤原仲平の遺領であったが、上庄と下庄に分けられ正暦三（九九二）年に上庄（後の阿弓河庄）が彼の娘の明子より平惟仲に売却された<sup>(25)</sup>。翌四年には国符によって石垣庄を不輸租田として郡司が入勘するのを禁じられた<sup>(26)</sup>。しかし、惟仲が太宰権帥に赴任することになり、その直前の長保三（一〇〇一）年に彼が建立した白河寺（寂楽寺）に石垣庄を寄進した<sup>(27)</sup>。かかる状況の石垣庄に対して、後に述べるように

(24) 前掲小山「高野山御手印縁起の成立」六二頁

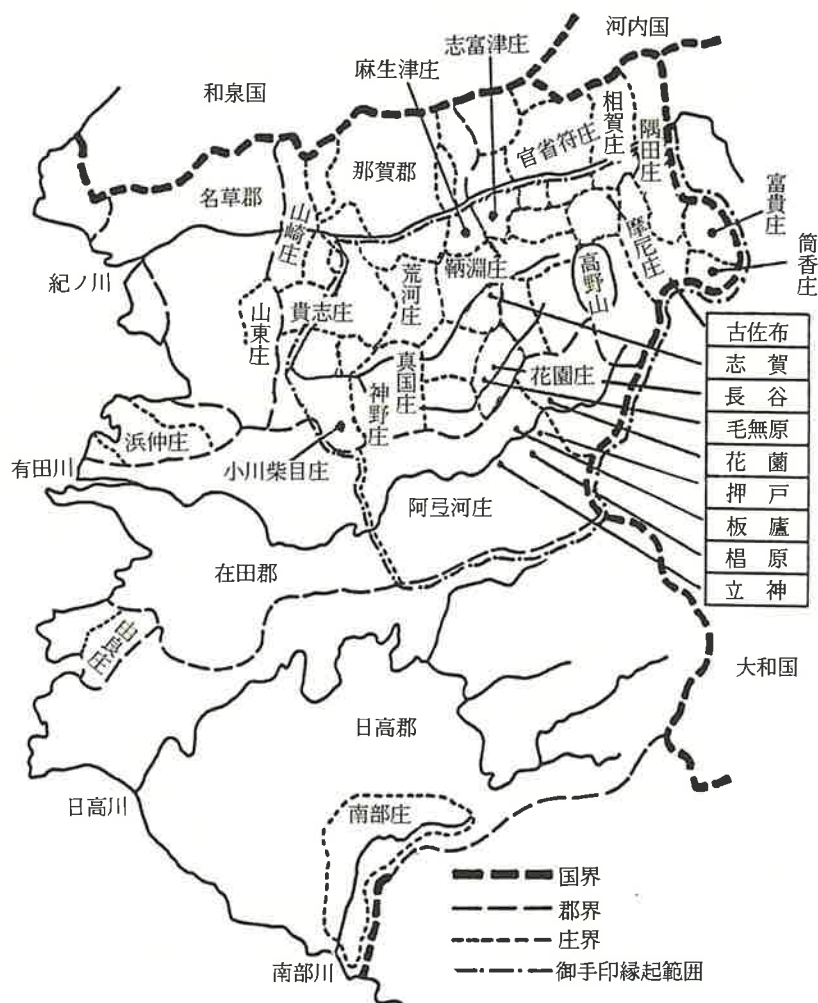
(25) 『阿』二号

(26) 『阿』五号

(27) 『阿』七号。工藤敬一「中世宇佐大宮領の構造と特質—とくに封郷を中心として—」（『九州庄園の研究』塙書房、一九六九年）八一頁には、平惟仲が大宰権帥

(図1) 御手印縁起の範囲と高野山領庄園

(豊田武編『高野山領庄園の支配と構造』より引用)



高野山は焼失した大塔の修復工事のため雑役の賦課に動き出し、石垣庄司が高野山周辺地域を横領したというのである。高野山は石垣庄をめぐり、権力の移行期を狙って動き出した可能性が高い。したがって、内容から判断すると寛弘元年官符が偽作されたとは考え難い。

次に、一連の寛弘年間の史料と高野山の動向

を照らし合せて総合的に把握し、御手印縁起の偽作時期と目的の核心を追求してゆきたい。小山氏は寛弘元年の官符のみならず寛弘五（一〇〇八）年の金剛峯寺帖案（以下のB）も偽作とする。しかし、文書だけで議論するのではなく、ほかの史料と高野山の動向を総合的に把握する試みを通じて文書の真偽を問う必要がある。

〳時代の長保五年に宇佐宮司大神邦利と争って敗れ解官

されたとする。

かかる試みによって「御手印」の偽作時期と目的の手掛りが掴めるからである。次の二通の文書を検討する。

(端裏書)

(A)「草」

注進

金剛峯寺焼失<sup>(御)</sup>修復等事

正暦五年 甲午 七月六日、大塔并講堂 但今人多<sup>(御)</sup>称金堂 二一間僧房為雷火烧失、但御影堂<sup>(但)</sup>残留之、

長徳四年、講堂被造始之、紀伊国司景理奉行、

嘉保二年 乙亥 大塔被始之、<sup>(但)</sup>国司藤原朝臣朝輔奉行、重任之功也、

三月七日 壬午 午時杣造始之、

六月七日 辛未 木造始之、

同三年 丙子 七月二十日、壇築始之、

永長二年 丁丑 八月二日 庚午 上棟、大工東大寺工賀茂成円、

康和二年 庚辰 十一月二五日、覆勘之、

覆勘使

史生一人 仲原守吉 史部二人 <sup>(但)</sup>八部行忠 紀則里、

同四年 壬午 五月五日、御仏御衣木杣作始之、

同五年 癸未 二月仏所始作之、

三月十一日、御仏手斧始、国司有佐奉行、

御衣木加持 檢校阿闍梨明算、

仏師五人 法印円成代歟、

十一月二五日 庚午 御<sup>(但)</sup>養 曼荼羅供、

大阿闍梨〔<sup>(長者)</sup>〕法務権大僧都經範、

讃衆二十 但寺僧、

久安五年 己巳 五月十二日 庚巳 申剋雷火落懸大塔、<sup>(但)</sup>地盤側 巽角也 忽焼失畢 (下略)

右、大略注進如件、

久安五年五月 日

行事入寺大法師在判

季預山簞大法 師在判<sup>(28)</sup>

(B) 金剛峯寺帖 伊都・那賀・<sup>(長)</sup>有多三箇郡司等

可任道理、糺行寺領志賀・長谷・毛無原・阿手河等郷々雜事状

帖、a 件山河内郷々、建立大師從寺家建立之時、所被定置四至内也、自爾以降、專他雜事所不負也、及末代人々妨方出来、建立大師御置手已相違也、或然申於公家、或致私妨、因茲寺家又注不安之由、奏聞於公家、未有一定之間、b <sup>(但)</sup>造大塔所闕役事、御願滯々尤有於斯、仍帖送如件、

(28) 『大』又統宝簡集一〇二一一七四二

早加郡勢件造大塔所随催仰郷々工夫可令役仕、但致于国造并白河寺愁者、今始横所出来也、於寺家者、自本願之時所領知也、是国内諸人所知歟、就中白河寺使乱入、左大臣殿御使相共責凌之由云云、仍申其事由、其返事云、專不加遣家使、若有称家使之輩、注姓名可言上之者、致寺家已本領郷々也、寺家所領四至内郷々也、何催工夫、不召仰雜事、郡々司等察之状、無他妨可令相叶寺家造大塔所雜事、敢勿致阿容、故帖、

寛弘五年十年二七日

都維那法師

座主僧正

別当阿闍梨

上座大法師

寺主大法師<sup>(29)</sup>

寛弘年間における高野山の動向を分析するためには、高野山の行動原因が把握できるように考察の時期をやや遡らせ前史から踏まえよう。その前史がAに現われている。Aの久安五（一一四九）年「金剛峯寺焼失修復注進状草」には、正暦五（九九四）年七月六日雷による火災で失われた大塔及び講堂（金堂）の修復の過程がよく示されている。火災のため失われた講堂は、四年後の長徳四（九九八）年に紀伊国司の景理の奉行で修復工事が始まる。ところが、寛弘四（一〇〇七）年に「小町阿闍梨、欲再興大塔上奏知識願文、然無 勅許、是依国司景理不執奏也、景理怠勤故、金堂未造畢、所以大塔願文無 勅裁也」<sup>(30)</sup>とあるように、高野山の小町阿闍梨（仁海僧都）は未だに金堂を再建していないのは景理の怠勤のためとする<sup>(31)</sup>。金堂の再建がうまく進んでいないことを示している。この金堂の修復工事がいつ終わっているのか定かではない。

ここで金堂が完全に再建されていないうちに仁海僧都は、なお大塔の再建をもくろみ願文を上奏していたものの、勅裁がなくその計画が難航している。つまり、高野山は金堂の完成を図りつつ、残されている大塔の修復工事の着手を引き続き促しているのである。大塔の再建を持ち出していることから金堂の工事はほぼ完成に向かっていたに違いない。このことから寛弘元年の官符で高野山が周辺の地域に雑役の注進を求めたのは、正暦五年火災によって失われた伽藍の再建をにらんだ一連の行動と言えよう。

ところが、寛弘四年に再建を図った大塔は焼失後、約一世紀が経過した嘉保二（一〇九五）年になってようやく本格的な工事が始まるのがAからわかる。大塔の修復工事ができなかった約一世紀間の高野山の事情について詳細ではないが、この間に大塔の修復工事ができなかったことは工事をめぐり迂余曲折があったことを間接的に物語るものであると思われる。ここで、

(29) 『平安遺文』四四六号、「金剛峯寺雑文」

(30) 日野西真定編集・校訂『新校高野春秋編年輯録』（名著出版、一九八二年）寛弘四年十月十一日条。この高野春秋編年輯録は江戸時代に編纂されたものではあるが、編纂当時はかかる寛弘四年にあった大塔再建

の記事の根拠となる史料が残されていたはずである。したがって、寛弘元年官符と同五年金剛峯寺帖は同四年の記事に関連していると見なすべきであろう。

(31) 講堂の担当奉行であった大江景理は、すでに長徳元（九九五）年東三條院の造営に携わっている。

寛弘元年の官符・寛弘四年の記事・寛弘五年のBは嘉保二年に大塔の本格的な工事が始まる前に高野山が大塔の修復工事の計画をたてて取り組もうとした計画だったと考えられる。つまり、寛弘年間における一連の史料は高野山による大塔修復の動きを示していると言えよう。

Bの傍線部bでも高野山が大塔の再建工事を推進していることがわかる。ところが、工事は一步も進まない様子がうかがえる。寛弘年間に高野山が大塔の修復工事を計画し推進したが、結局は計画が実らず挫折してしまったのであろう。寛弘の前史を含めてかかる高野山の動向からみると、寛弘年間の一連の史料である寛弘元年の官符<sup>(32)</sup>やBは大塔再建を狙った高野山の行動を示した内容の文書であり、偽作されたとは考え難い。このBには「大師御置手」が登場する。これは後の御手印縁起の成立に繋がる内

容のものである。「大師御置手」とは空海の手印が捺されているものであり、御手印縁起の核心とも言えるものがここで確認される。

かかる高野山の動向に注目せず、小山氏<sup>(33)</sup>は寛弘元年の官符のみならずBについても「金剛峯寺雑文によって伝来した史料であってにわかには信じ難い」とし、偽作されたという見解を示す。氏は何故に御手印縁起が成立した寛治二年以降になって、御手印縁起によらず寛弘五年の金剛峯寺帖を偽作してかかる大塔工事の雑事の負担を促さなければならなかったのか説明する必要がある。

ここで、寛弘年間の文書が偽作ではないことを含めて前章より検討してきた御手印縁起の成立についてまとめておく。次の(表3)は御手印縁起と関連する記事を整理したものである。

ここで①の寛弘元年から④の寛治二年までの間

(表3) 御手印縁起に関わる記事

	時 期	内 容	史 料
①	寛弘元(1004)年	御手印縁起の一部である弘仁七年七月八日官符が見える	『平』436
②	寛弘五(1008)年	「大師御置手」が見える	『平』448
③	延久四(1072)年	①の文書を収録している高野寺縁起が成立する	『校』
④	寛治二(1088)年	御日御手印縁起になるもののすべてが白河上皇に献上される	『高』
⑤	大治二(1127)年	①と②の文書、御手印縁起の一部である弘仁七年七月八日官符、同年七月二八日国符、承和元年九月十五日四至を収録している金剛峯寺雑文が成立する	
⑥	長承二(1133)年	高野山密厳院相賀庄と隅田庄との堺相論に「大師御手印」が見える	『弘』
⑦	仁平元(1151)年	渋田庄をめぐる高野山大伝法院と興福寺との相論に「大師御手印」が見える	『平』2291 『平』補221
⑧	平治元(1159)年	白河上皇に献上された④が高野山に寄進される	『大』続11
⑨	建保六(1218)年	御手印縁起が確認できる	『大』宝560
⑩	貞応元(1222)年	御手印縁起の構成が確認できる	『大』続252

(注) 『平』は『平安遺文』、『校』は『校刊美術史料』、『高』は『高野春秋』、『弘』は『弘法大師伝全集』、そして『大』は『大日本古文書』である。

(32) この文書は「醍醐寺本諸寺縁起集」と「金剛峯寺雑文」にそれぞれ伝来しており、前者は藤田嗣世編『校刊美術史料』寺院編、上、中央公論美術出版、一九

七二年、後者は前掲『弘法大師伝全集』第一巻に収録されている。

(33) 前掲小山「高野山御手印縁起の成立」七四～七五頁

に後日御手印縁起になる文書類の内容が手揃い、④の寛治二年以降⑨の建保六年の間には平治元年の「官符絵図記文等奉納状」における巻の順序が再配列され、なお巻の名が改められて御手印縁起となる。つまり、①より「御手印」意識が芽生えはじめ、④以降は御手印縁起に向けて巻の再配列と再命名が行われたのである。

繰返しになるが、本論で論じてきた御手印縁起の成立と目的について整理すると赤松・小山の両氏とは若干異なる。両氏の見解を再確認しよう。赤松氏は寛弘元年の官符に御手印縁起の一部である弘仁七年七月八日の官符が確認できることから、寛弘元年の直前に御手印縁起が偽作されたとする。偽作の目的としては正暦五年に火災によって失われた伽藍の再建を目指していた高野山にとって国司の圧迫からのがれ、寺領庄園を獲得して寺領としての自立を目指すためだとする。一方、小山氏は寛弘元年の官符とBを偽作されたものと断定し、御手印縁起は寛治二（一〇八八）年白河上皇に献上するものとして偽作されたとする。

ところが、検討してきたように寛弘元年の官符と寛弘五年の金剛峯寺帖が偽作ではなく、なお御手印縁起は「御手印」の成立過程を通じて誕生することが明らかになった。寛弘年間における高野山の動向、つまり石垣庄との紛争と大塔の修復工事を計画し周辺の郡郷に雑役の賦課を働き掛けようとした文書の内容とを合せて総合的に把握すると自ずから御手印縁起の偽作目的も明確になる。寛弘元年の官符とBから高野山の主張は雑役を正当化し雑役賦課を目的としていた。赤松氏のいう大塔の再建を目指した一連の高野山の行動は確認できるものの、寺領庄園の獲得の意図は確認できない。

以上、「御手印」は寛弘元年から徐々に内容の一つずつ揃えたものである。この「御手印」は高野山が火災によって失われた講堂を修復した後、引き続き大塔の修復工事を進めるための目的で偽作されたのである。しかし、高野山にかかる大塔修復工事の計画は失敗におわり、嘉保二年の本格的な工事まで待たされることになる。次章では、御手印縁起に現われる四至観念の変化について追究する。

### 第三章 御手印縁起の四至

御手印縁起には地域を現す四至があり、その四至が領域的観念を含んでいることは確実である。では、四至について「御手印」まで遡りその領域の意味を検討する。

御手印縁起にはほぼ同じ地域と思われる四至が何カ所も散見できる。西岡虎之助氏<sup>(34)</sup>は御手印縁起に見られる領域について観念的領地形態だとする。氏の見解を引き継いで小山氏<sup>(35)</sup>は御手印縁起にみられる領有観念はあくまで宗教的な聖域の確保であり、寺領庄園の獲得を目指す手段として使われるのは十三世紀以後であるとする。

まず、四至の意味を御手印縁起から探ってみよう。御手印縁起（弘仁七年七月八日の太政官符）に「山河地水悉是国主有也」のように、土地は国家のものとし、国家の土地所有権を認めている。確かに、官符に登場する四至が高野山の私的土地所有に基づく領域的な支配を念頭においたものではないことが明らかである。

そうすると、小山氏のいうように宗教的聖域の確保を目指したものであろうか。寛弘元年の

(34) 西岡虎之助「初期庄園制における土地占有形態」『庄園史の研究』上巻、岩波書店、一九五三年

(35) 前掲小山「高野山御手印縁起の成立」七〇～七一頁

官符で引用している寛弘元年七月二八日の金剛峯寺の奏状には四至が宗教的な聖域のように見せかけ、傍線部Aによると四至内にある周辺の郡郷に雑役を賦課するためであったことがわかる。つまり、高野山は周辺の郡郷に必要な雑役を賦課させようとした狙いがあった。

Bにおいても大塔を再建するため雑役を周辺の地域に掛ける根拠として「大師御置手」を取り上げていることである。その理由は国家によって認められたという権威を借りて四至内の地域に雑役を賦課させようとする姿勢である。ここでも雑役の賦課が主たる目的であり、宗教的聖域の確保と領域的支配に繋がる手掛りは見当たらない。

Bの傍線部aからは四至内の地域が草創期の高野山伽藍を建立する際、雑事を負担させた領域であるとし、雑役の負担を要求している。この四至とは御手印縁起の四至に該当する地域であり、寛弘元年官符に見える四至でもある。ここから「御手印」の四至の観念が生まれたと思われる。つまり、御手印縁起の四至の観念が最初は宗教的問題より雑役の賦課を目的にしていることがわかる。

ところが、草創期に伽藍の建立のため周辺の郡郷に雑事に賦課させた地域であることを振るかざしたものの、高野山が寛弘年間に計画した大塔の修復は容易に進まなかった。すでに、高野山の周辺地域には石垣庄のように庄園が成立しつつあり、高野山の計画とおりには雑役の賦課は進まなかった。結局、寛弘元年の官符とBに現われる四至内の地域に大塔の修復工事のため雑役の負担をさせることは挫折してしまった。以上まとめると、これらの四至は雑役の負担を求める地域であり、領域的な領有観念のないこ

とは明らかである。しかし、寛弘元年に現われたこの四至は時代が下るにつれて、その意味がかわってくる。

すなわち、十二世紀なかばになると、「御手印」の四至が庄園の堺相論に持ち出されるようになる。長承二（一一三三）年十一月高野山沙門覚鑊申状<sup>(36)</sup>は、高野山密厳院領相賀庄と石清水八幡宮領の隅田庄との堺相論に関する文書である。ここで「御手印」の四至が大塔の修復工事のような雑役の賦課のためではなく、領域的な支配観念の証とも言える堺相論に持ち出されたのである。この時点よりいよいよ四至が従来の雑役の賦課地域ではなく、領域的支配の観念をもつようになったのである。そして、仁平元（一一五一）年の渋谷庄をめぐる高野山の大伝法院と興福寺との相論<sup>(37)</sup>の時も「御手印」の四至が高野山側の主張の根拠となり、同じく領域的支配概念を現した。以下、この文書を取り上げよう。

件渋谷者、高野山之旧領万許町之内也、昔  
 誉田 天皇殊降論旨、割家地万許町、奉高  
 野鎮守丹生大明、彼第三神宮、今現在于当  
 庄内、大師上登之日、地主権現示獺者形、  
 隨身大小黒犬、件犬墓又現在于当庄内、彼  
 獺者語大師曰、吾是此山山王也、則献此領  
 地増威福、吾押山水極鹿人氣、幸逢井、吾  
 德至也云々、其四至南限南海、北限日本河、  
 東限大日本河、西限応神山谷也、委細之趣  
 難顯紙筆、北限者則当庄之北吉野河也、

ここで注目したのは、長承二年と仁平元年はすでに「御手印」が寺外に流出している時期であったことである。つまり、寛治二（一〇八八）年白河上皇に献上品として献納され、平治元（一一五九）年に美福門院によって鳥羽上皇の

(36)『平安遺文』二二九一号、「根来要書下」

(37)『平安遺文』補二二一号、「根来要書下」

遺品の中から発見され御影堂に奉納された<sup>(38)</sup>。「御手印」が高野山になかった時期であったにもかかわらず、高野山の主張は応神天皇が万許町の家地を丹生大明神に譲り、それを大師（空海）に譲渡したという「御手印」の内容を踏まえている。かつ、傍線部は四至は「御手印」のものと一致している。このように「御手印」が手元になくとも内容と四至を正確に取り上げ庄園の堺相論に持ち出せたのは、流出する前に「御手印」の内容の理解に関して高野山側に相当な蓄積があったことを示していることであろう。

平治元年「御手印」が返還されると、高野山は治承四（一一八〇）年に荒川庄と田仲・吉仲両庄との堺相論<sup>(39)</sup>、そして寿永三（一一八四）年阿豆河庄の領有をめぐる寂楽寺との相論<sup>(40)</sup>にも「御手印」を持ち出した。阿豆河庄の領有をめぐる高野山と寂楽寺との争いは、以前の長寛二（一一六四）年にも確認できるが<sup>(41)</sup>、おそらくこの際も高野山は「御手印」を根拠にしたのであろう。寿永三年「御手印」を根拠とした高野山の主張が一旦は源義経と頼朝に認められ、二人から下文によって安堵された。この後、阿豆河庄は寂楽寺に安堵されるが、絶えず高野山は自領であると主張を繰り返した<sup>(42)</sup>。ここでの四至は御手印縁起という観念ではなく、その前段階の「御手印」に基づいたものである。

かかる「御手印」の過程をへて建保六（一二一八）年からは御手印縁起という確固不動の概念を作り出し領域的支配に乗り出す。この時期より高野山は一貫して御手印縁起という理念の

もとで四至内の地域を自領化する行動を繰り返すことになる。建保六年には高野山と吉野との堺相論、すなわち中津川と野川をめぐる高野山と金剛寺が衝突した<sup>(43)</sup>。相論はすでに同三（一二一五）年から起こっているが<sup>(44)</sup>、ここで「御手印」の四至が取り上げられている。この相論は阿豆河庄と同様に以前から自領化を目指しており、高野山は養和年間（一一八一～八二）にも中津川と野川の返還を促している。なお、御手印縁起は寺領確保の手段にとどまらず四至内から地頭を追出し、一円領化を目指してゆくのにも利用されている<sup>(45)</sup>。

以上、寛弘年間において最初に現われる「御手印」の四至は、火災で失った大堂の再建のため雑事賦課を目的とした。ところが、十二世紀なかば頃からの「御手印」の四至は領域的領有観念へ変質していくことになる。引き続き「御手印」は鎌倉初期に御手印縁起となり、その名のもとで寺領の確保・一円領の根拠として用いられるようになる。

## おわりに

以上、高野山が雑役の賦課や寺領の確保、そして一円領化を目指し、その根拠として一貫して取り上げた御手印縁起について、その内容の定義と成立時期や目的、そして四至の意味変遷を検討した。

従来ほぼ定説化されてきた赤松氏の研究では、御手印縁起が十一世紀初めの寛弘元年の直前に偽作され火災で失われた伽藍の再建を目指してい

(38) 註(12)の史料に同じ

(39) 『大』統宝簡集四六―三八三

(40) 『阿』三七号

(41) 『阿』一九号

(42) 『阿』一二四号

(43) 『大』又統宝簡集一〇七―一七七―と註(8)に同じ

(44) 註(43)の前者に同じ。この時期には御手印縁起という明確な概念が確認できない。

(45) 前掲小山「高野山御手印縁起と庄園制」二七～三一頁に参照されたい。

た高野山にとって国司の圧迫からのがれ、寺領庄園を獲得して寺領を確立するためだとする。小山氏はこの見解に触れず、十一世紀末から領域的庄園支配が成立してくるとする。すなわち、領域的庄園制支配が小山氏より約一世紀も領域的庄園支配を繰り上げる赤松氏の見解は置いたままであった。そこで最近小山氏は、御手印縁起は寛治二年白河上皇に献上するために偽作された。また高野山が十一世紀には寺領庄園の獲得にそれほど熱心ではなく、あくまでも宗教的領域の確保であり、御手印縁起が十三世紀以後寺領庄園の獲得手段として持ち出したとする新たな見解を示した。ところが、本稿で検討の結果両氏とは異なる次の点を明らかにした。

①御手印縁起とはある日突然作られたものではなく、次のような過程をたどった。寛弘元年に御手印縁起の一部がつくられ、寛治二年までには御手印縁起の内容が揃った。しかし、この時のものは御手印縁起とは呼ばれず、かつ後日に御手印縁起となるものとは巻の命名と配列が

異なる。鎌倉初期の建保六年になって御手印縁起という用語が確認され、その縁起の意識が確定される。

②「御手印」の偽作目的は、正暦五年の火災で失われた高野山の伽藍の再建のなかで、講堂の再建の後にうまく進まない大塔の再建を打開するため、周辺の郡郷に雑役を賦課するためであった。かかる高野山の意図から「御手印」が偽作される。

③当時「御手印」の四至は領域的領有を前提としたものではなかった。しかし、十二世紀中半になると、堺相論にこの四至を利用し領域的領有の姿勢を現すようになる。

かかる経緯のある御手印縁起は高野山の膝下庄園の確保の根拠<sup>(46)</sup>として用いられ、なお膝下庄園の一円領化の根拠<sup>(47)</sup>としても持ち出された。この御手印縁起のケースは権門寺院がいかに庄園制に関わる縁起類を大切に守り庄園の支配や確保にいかによりかを示している。

(46) 山陰加春夫「南北朝内乱期の領主と農民」『日本史研究』、二五九号、一九八四年

(47) 前掲小山「高野山御手印縁起と庄園制」

